

# 「練習艦隊の蒔いた種」(2)

平 間 洋 一  
(呉地方総監部防衛部長)

## ▲アロハ桜の謎▼

舞鶴の共楽公園にアロハ桜と呼ばれる百本の桜がある。「我々は日本と戦ったが、国籍はアメリカであり、祖国は日本、荒れた祖国に少しでもうるおいを」と舞鶴に進駐した日系兵士23名が桜の苗木百本を植え、現在舞鶴の新名所になっている。その植樹記念碑によれば、その桜を植えた日系二世兵士全員が、朝鮮動乱に出征し戦死したと書いてあった。

国内巡航で満開の桜が咲く舞鶴に入港、桜を觀賞し、石碑に目を止めた田辺司令官が、「今度ハワイに行った時、遺族を探して、桜はこんなに立派に成長し、舞鶴市民も非常に大切にしていることを知らせてやりたいなあ」と話され、写真班長に命じ共楽公園のカラー写真を遺族分として23枚持参した。

ハワイ入港後、元自衛官で現在パンフィック・モーション・ピクチャー社長にその処理をお願いしたところ、ハワイ報知新聞が大キャンペーンを実施、「アロハ桜の謎」として16頁に及ぶ特集を行ない、次の事項が判明した。

① 植樹した二世兵士中戦死したのは2、3名で、他の人は、現在も健在なこと。

② 桜を植えた動機は、当時物も不足し生活もずさんでいた市民と、野球を通じて親善を深めようと試合を申し入れ、二十二年春、オール舞鶴との親善試合をし、その夕食会とき「私達は不幸にも日本と戦ったが、日本は父母の園だ。舞鶴の繁栄と友好のしるしに、サクラの苗木を贈りたい」との申し入れがあつて、実現したこと。

③ しかし、現在判っている氏名は、23名中野球試合の時の選手に選ばれた次の人達だけである。

- 舞鶴のアロハの桜 植樹者名
- エドウィン今村
  - ハリート村田(ホノルル)
  - スタンレー木津(ソルト・レーキ市)
  - 稲嶺 清 勇(ホノルル)
  - ブラッキー安竹(パール・シチー)
  - トーム 大 城(ワイパフ)
  - ジェームス西川(日本在住)
  - チャーレス鶴巻(ホノルル)
  - チャーレス鳥袋(ホノルル)
  - トミー 大 石(ロサンゼルス)
  - ブラッキー田川(ホノルル)
  - リチャード佐藤(エ ー)
  - ディック猪口(ワイパフ)



④ この他、練習艦隊の共楽公園の桜の写真がもとで、当時舞鶴に駐留したところある日系二世兵士20〜30人がハワイ舞鶴会を結成し、年に一〜二回の会合を開き往時を思い出していること、そして、この中には舞鶴生れで日系二世延国氏と結婚した延国千恵さんも含まれ、本会の会員が、この記事がもとで来年四月、共楽公園の桜の季節に訪日する計画が生れたことなどが、ハワイ報知新年特集号及び小笠原史武氏等の連絡で判明した。

ハワイ報知の次の写真が示すように、練習艦隊のこの写真がもとで、舞鶴市と

ハワイの間に大きな友情の虹がかかれ、これに過ぎる喜びはない。  
以下に、「百本ものサクラを一体誰が植えたのか?」という「アロハ桜の謎」というハワイ報知新聞に記載された部分中、座談会を除き植樹者発見にかかわるいきさつの主要な部分を紹介したい。

## 「アロハ桜の謎」(ハワイ報知新聞)

ハワイ出身の日系二世兵士が、戦前は海軍のまぢであり、戦後は大陸からの引き揚げ者受け入れ港となった舞鶴市に桜を植えた事実があり、この桜が今では「アロハの桜」として市民から親しまれていることを知ったのは、八二年十月十八日海上自衛隊の練習艦隊が真珠湾に入港した時であった。

私は例によって練習艦隊の入港を取材に行っていた。  
そこで現パンフィック・モーション・ピクチャーの社長であり、ずっと昔自衛隊にいたことがあることから、いつも艦隊の入港風景をフィルムに収めたり、士官の世話をやいている小笠原史武社長に会った。  
小笠原社長は、首席幕僚の平間一等海佐から托されたといつて、私に三枚の写真を渡した。

私はそれらの写真をもとに「舞鶴市アロハの桜」というタイトルで記事を書き、同月二十二日版に掲載した。  
三枚の写真は、一枚が桜が咲きほころぶ共楽公園全景、もう一枚が「ハワイ日系二世をしのぶ、友好平和のサクラ」と刻まれた

石碑の写真で、この二枚が新聞に載ったものだ。

他の一枚は多分その石碑近くに建てられてあると思われる石版（やはり石碑か？）の写真で、これには次のように刻まれてある。

### ハワイ日系二世をしのぶ

#### 友好平和のサクラ

第二次大戦、後海軍のまち舞鶴市は大きな転換に迫られ、市民は方途を失なつて虚脱化してしまつた。荒れはてたまち並みと山野、この中で、若いサクラの樹木が次々植えられ、舞鶴市民に平和と復興の勇気を付けてくれました。

この『友好の使者』は、二十年後半から舞鶴に駐留した米軍のハワイ出身二世兵士二十三人です。『国籍はアメリカだが、祖国は日本、荒れた祖国に少しでもうるおいを』と、二十一年春どこからかサクラの苗木約百本を運んで、共楽公園と付近の学校周辺に植えました。その年、二世兵士らは朝鮮戦争の勃発で舞鶴市を去りました。

その後には伝えられたのは、二世兵士全員戦死の報、百本のサクラはスタスタ育ち、いまでは、舞鶴のサクラのリーダー格になつています。舞鶴市を荒廃化し、二世兵士らの命を奪つた『戦争』、世界平和のための犠牲ともいえます。

祖国日本の平和と復興の願いが込められたこのサクラをみんな育て、二世兵士らの冥福を祈つて碑を建設しました。

#### 寄贈者

明石市中朝第五九番十三号

### 寿建設株式会社

#### 代表取締役 木村 寿賀市

この記事の最後に、この桜を植えた日系二世兵士の名前を探している。御存知の方は私のところまで連絡を乞ひ旨書いたところ、谷口ストアの谷口氏、ワイパフの佐藤虎次郎氏、後藤健治氏などから電話をいただいた。

そして広兼美恵子さんという方から次のような便りをいただいた。

#### 庄司様

舞鶴市『アロハの桜』の記事を拝見しました。亡き前夫もその一人ではないかと思われまので一筆お知らせします。

舞鶴在留。昭和二十三年～二十五年。二十五年八月朝鮮動乱にて朝鮮へ。

十月戦死。残された遺児もハワイ大学を卒業、三十歳の主婦となっております。

パンチボールへ参り、立派に子供を育てあげた事を報告するのを、私の一つの誇りとしております。

#### 広兼二郎

昭和二十五年十月十二日戦死

於朝鮮 当時二十五歳

追伸 紙上では『二十一年の春サクラの苗木、その年二世兵士たちは朝鮮戦争勃発』とありますが、朝鮮動乱は昭和二十五年ですので念のため。

(原文のまま)

この広兼さんの手紙をみてはじめて碑の文章に矛盾があることに気がついた。

広兼さんの指摘している通り、二十一年

に朝鮮動乱はまだはじまつてはいない。

そしてこれは後になつて分つたことであるが、舞鶴に日系二世部隊が駐留したのは昭和二十二年の春からであつて二十年後半からではない。

また、この桜を植えた二十三名全員が戦死したと碑には刻んであるが、戦死したのはごく一部で、今も生き残りがハワイにいらつても分つた。

そして最大の発見は、このハワイに、舞鶴市に駐留していた日系兵で組織された、『舞鶴クラブ』があることである。

舞鶴クラブのことは、佐藤虎次郎氏が紹介してくれた渡辺憲市氏に電話で話して判つたことで、渡辺氏によると、一九四七年春、彼の所属する第五〇〇情報部隊の第三五四と三五五の二中隊が舞鶴に進駐した。

そして約一年半の間、舞鶴市に駐留した後ハワイに帰り、それ以来『舞鶴クラブ』は毎年二回程集まつているということである。

私は渡辺氏に、舞鶴クラブのメンバーで出来る限り当時の事情に詳しい人を四、五人集めてくれるように頼みこんだ。

渡辺氏は方々へ電話をかけ、桜を植えた人を探してくれたが、どうしても見つからないということであつた。

私は、桜の本人はいなくても、その当時の事情をきくことにより、なぜ日系二世部隊が桜を植えたのか、その心情を浮き彫りに出来ると思ひ、座談会を開いて話しをきくことにした。

座談会に集まつてもらつたのは次の諸氏である。…(中略)…

この座談会を終えた次の日、渡辺さんから電話があり「桜を植えた人がみつかりました」と知らせてきた。

電話があつた時、私はちょうど出かけていなかったのであるが、「エーッ」と驚くと同時に、もう一日早ければよかつた、座談会に出てもらえればよかつたと、悔やまれてならなかつた。

桜を植えた本人というのは、現在ワヒアワに住み、ヒッカム空軍基地に勤務するエドウィン今村氏であるという。

とにかく、私は躍る胸をおさえながら、次の日今村氏の家へ電話をかけた。今村氏は留守であつた。電話には舞鶴出身だという奥さんが出た。「主人はゴルフに行つています。七時ごろに帰るはずですよ」ということである。

結局その夜今村氏と話すことが出来た。今村氏はところどころ忘れた、記憶がないということであつたが、とにかく次のようなことが判明した。

① 今村氏のいた部隊は一九四八年から五〇〇年にかけて舞鶴市に駐留した。

② 桜を植えたのは、五〇年(昭和二十五年)の春である。

③ 桜を植えたことになつて二十三年といふのはどこから出た数字が分からぬ。

④ 今村氏の部隊は朝鮮戦争に行ったが、現在までに死亡したのは二人だけであ

○石碑に刻まれている二十二年春に桜を植えたのであるのは二十五年春、間違ひであること

# 靖国とアーリントン

岩 永 賢 二 (機 40 期)

○また二十三名の日系兵士が全員戦死とあるが実際にはほとんどが生存していること  
○二十三名という数字が根拠のあるものとは思われない——などが判った。

今村氏が渡辺さんに托した野球チームの写真には、一人の白人将校と十四名の日系兵士がうつっている。

実際に桜を植えた人達である。

少し発見が遅れた感がしないでもないがなにはともあれ、永い間不明であった舞鶴の桜の謎が解けた訳である。

おこがましい話ではあるが、この座談会がその発見の一助となったことに、私は大きな喜びを感じている。

舞鶴の桜よ、ハワイと舞鶴の友情の象徴として永久に咲き続けてほしいと祈りながら、最後に薩摩守忠度の作だと伝えられる和歌を一首載せて、ペンを置くことにする。

さざ波や志賀の都は荒れにしを  
昔ながらの山桜かな



大阪府箕面市が、戦没者を慰霊する忠魂碑を小学校用地に市費で移転して再建したのは、政教分離原則でうたった憲法第二十条及び八十九条などに違反するとして、主婦等市民十人が50・2・26提訴。57・3・24大阪地裁は、「市が公金を支出して忠魂碑を移転したのは憲法違反」との判決を下した。

次いで51・52年に箕面市戦没者遺族会が、市立西小学校そばに在る忠魂碑の前で神式と仏式で行った慰霊祭に、市長や教育長が参列、市のマイクロボスを使って参列者を送迎させたり、式の準備や当日に市の備品を使用したりして、市が積極的の後援したのは、宗教団体に公の財産の支出を禁止した憲法二十条及び八十九条に違反しており、市長等は物品使用料や、教育長等が参列した時間に相当する給与など一万五千三百十八円を返せと、例によって主婦等十人が訴訟を起し、これに対して58・3・1大阪地裁は、「信教の自由の立場から、公務員である教育長が宗教儀式に参列することはあり得ず、参列した場合はすべて、私の立場になる」として、当日の給料三千五百五十六円の返還を命じた。

つまり、公務員は私の立場でしか宗教行事に参加出来ず、若し実質的に公務員が宗教行事に参加した場合は違憲になると言っているのである。

ところで、靖国参拝に就いては、官房長官は58・3・1の記者会見で、公人私人の区別をしないと言う鈴木内閣以来の方針を踏襲すると述べ、中曽根内閣も公人私人の区別は明確にしないまま参拝することにした。

一方、中曽根首相も三月一日、今年の参拝をどうするかとの問いに、「今までの政府見解通りに行動する」と答えた。

公人私人の区別に、何とも歯切れの悪い返答。自分でも何と言ってよいものやら判らないとは情けない話ではあるまいか。

戦後、防衛庁長官は必ずワシントンに引き米国防長官と会談し、アーリントン墓地の無名戦士の墓に詣でて花環を捧げたが、それは国と国との儀礼であった。

近くは中曽根首相も今年一月七日(日本時間一月八日)無名戦士の墓に献花し、その時十九発の礼砲が轟いたと報ぜられた。その時首相は果して公人であったか私人であったかそれが問題であるが、この場合は

明らかに公人である。何故ならば、礼砲であれ甲砲であれ私人と私人の間で礼砲を打つことは有り得ないからである。然し首相が公人とする、前記判決によって参拝は憲法違反となる。(靖国参拝が悪いとしたら、アーリントン参拝など尚悪い筈である。それともアーリントンは構わぬ。靖国だけが悪いとも言つてもよろしいであらうか)。

そして、若し首相が私人であったら、あの花環代は勿論、運搬代等その他一切の費用は中曽根康弘氏が個人で出したか。個人では絶対に出してはおるまい。花環が日本で作られたか、或はワシントンの日本大使館あたりで準備したか知られないが、あの費用は明らかに国から支出された筈。そうなる中曽根氏は国費を濫用したことになる。更にその間の給料分は国に返還すべきだった筈。中曽根氏は一体返還しただろうか? 返還してはおるまい。第一、中曽根氏は、国費を濫用したとも、給料分を返還すべきとも、全く考えておるまい。

中曽根首相のアーリントン参拝が、公人であっても私人であっても、同じく憲法違反であると言う思わぬ結果になっても、誰一人としてそれに文句付けた人がなく、第一そんなことに気付いてさえいないのは、考えて見ると不思議である。

何故この様なおかしなことになったか。それは憲法その物が最初から矛盾を包蔵していたからであり、今になってそれが表面に出て来ただけのことである。古来、各地には多くの忠魂碑(名前は色々違つてはいるが)があり、多くの人達が